

「平和団塊」の「100年人生」

「初の「三世代平等社会」を達成」

堀内正範 元『知恵蔵』編集長

(筆名 堀 亜起良 東洋哲学者)

はじめに

「平和団塊」が体现する長寿モデル

ここで「三世代」というのは、「青少年世代（成長期）」・「中年世代（成熟期）」・「高年世代（円熟期）」を指しています。人口に占める高齢者（六五歳以上）が二五%（四人に一人、二〇一五年に）に達したところから、これまでの「青少年＋中年＋ ∞ （アルファ）」から新たな「高年世代」を加えた「青少年＋中年＋高年」という「三世代現役時代」が始まっているという認識が、まずは高齢者に求められ、広く納得されることで理解されていくでしょう。自分が人生三期のどこに属しているかはだれもが実感としてわかるもの。身近な例としては自分・子・孫の三代のそれでしょうか。長寿時代です。自分と両親が「高年世代」という方もいるでしょう。

一九五六年生まれの人が六五歳ですから、「団塊」（戦後一九四七～四九年生まれ）のみなさんは、「古来稀なり」といわれてきた「七十古希」に達したということになり

ます。

本稿の筆者は「団塊」よりすこし上。これまで世紀を越えて、失礼とは思いながら、みなさんを「団塊」と呼んで、その活動ぶりを見守ってきました。先の大戦の敗戦のあと、焼け跡で「一億総サンゲ」をした親たちが戦後復興につとめるなか、未萌の新時代を託されて生まれた戦後っ子、コロナ禍で活躍の管義偉総理（一九四八年生まれ）や尾身茂博士（一九四九年生まれ）もその仲間です。

ご承知のように「団塊」は、作家の堺屋太一さんが一九七六年に『団塊の世代』を書いて、そのポリウムゆえの社会的影響を指摘して以来の呼び名で、進学・就職・結婚・役職・退職金・年金・医療・・・でその影響が注目され、長寿時代とともに長命な流行語になっています。そしていま「パンデミック」（コロナ感染の世界的大流行）を契機に、世界初出の第三の現役として、保持している知識・技術・人脈を活かして、二一世紀の国際潮流である「社会の高齢化」の事業活動を展開しようとしているのです。これは「ニッポン発二一世紀オリジナル」としての快挙であり、ジャパン・ミラクルと評される国際貢献であり、歴史的壮挙なのです。

本稿では表題のように「平和団塊」と呼んでいます。

なぜかという、本稿のメインテーマである「平和の伝承」を論じる場ではその存在を無視軽視してはいけない人びと、終戦翌年である一九四六年生まれの一二〇万人

と団塊と同じ超二五〇万人が生まれた「ぶらさがり団塊」の一九五〇年生まれとを含んで五年間を戦後世代としているからです。新世紀を迎える二〇〇〇年一〇月の統計でちょうど一〇〇〇万人でした。いまも九六〇万人（二〇二〇年一〇月）を数える戦後平和の体現者の人びとを指しています。

戦後っ子一〇〇〇万人のみなさんの「一〇〇年人生」は、両親から託された平和の持続と世代伝承を実証する「百歳の過客」の歴史的成果として記憶され記録されることでしょう。

これから四半世紀、初代体現者として「一〇〇年人生」の到達をめざしながら、日本社会の高齢化を達成しようとしている「平和団塊」のみなさん。「人生一〇〇年」に達したとき、ニッポン発二一世紀オリジナルである「三世代平等社会」と「平和国家一〇〇年」が実証されることとなります。いずれは高齢化後進の諸国が後追いつるに違いないモデル事例として。

いまみなさんは戦後七六年を精いっぱい生きてきて、「古希期」にいます。「高度成長」期を支え、「九割中流」の世相をつくり、バブル経済に遭遇し、おおかたの人の髪は白くなったことでしょう。

「戴白の老も干戈を睹（み）ず」

というのは、髪が白くなった老人すら人生に一度も戦争に出会わなかったという幸

運を伝えることばです。歴史上ではそれほどに戦乱のときが多く長く、平和で安眠できたときがいかに少なく短かったかを伝えていきます。

幸せにも、幸せにも、戦火のない「平和」のもとで生まれ、ともにひもじく貧しい時期に育ちはしたものの、競い合って学び、実直に勤めてみんなが等しく豊かになった国土で、世紀をまたいで高齢者となった「平和団塊」のみなさん。

初代である自分たちばかりでなく、すべての人の人生にとって普遍的な価値である「長寿」のために「平和」は欠くことのできない条件であることを身をもって体現していくことになるのです。

この「平和団塊の一〇〇年人生」こそが、二一世紀の日本にとってばかりでなく、国際社会の新世纪のモデル事例になるジャパン・ミラクルなのです。

心から「平和団塊」のみなさんの歴史的事業の完遂を期待いたしますが、いうまでもなく残り二六〇〇万人のうち、同じ事業に参画している仲間のみなさんは、広い意味では「平和団塊」の世代に含めてもいいのでしよう。2021・9・1